

小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の 影響と「表現技術」指導

飯 田 和 明

1. 「小砂丘とプロレタリア教育」への視角

戦前期生活綴方教育の中核としての役割を果たした『綴方生活』誌の主宰者＝小砂丘忠義は、彼の研究の第一人者といえる中内敏夫氏によって「説明のできないケタ外れの人間」（『綴方生活』復刻版月報第8号 1975,6）と評され、また朋友、野村芳兵衛によっては「鯨のように何でも飲みこむ男」⁽¹⁾と言われた、今日にその命脈を保つところの「生活綴方教育」の源流を為す巨人であるが、一方で「ひどく矛盾していて、ちぐはぐに見える言行上の特徴」を持ち、「時代の先端をゆくようなことをいうかと思うと、他方にはどだい復古的なもう一人の小砂丘が姿を現す」（中内敏夫「生活綴方の原像考—小砂丘忠義論」『教育』国土社 1970,2）とも言われるように、一見、時に自己矛盾、二律背反の観を呈する人物である。しかし、彼の生涯を通覧してその人物像をとらえようとするとき、そこには一貫する「意味」の措定が可能であり、そのことは作文・綴方教育、また教育一般を考える上での有効な概念を析出することにつながる。小砂丘研究は大きく分けて、彼が生まれ育ち、師範学校を卒業して小学校の教師になり、児童文集活動を創始し、さらに、上田庄三郎らと教育結社を組織して言論活動を展開して行った「高知時代」について、そして、上京し、『鑑賞文選』、『綴方生活』の主幹として全国の子ども、教師にあてて活動を展開した「上京以後」について行われている。従来の小砂丘研究の弱点は、その「高知時代」と「上京以後」を通覧しての考察が行われることが少なかったところに存する。殊に小砂丘の「高知時代」については、その史料の整備公開が「上京後」のものに比べて遅れたこともあり、未だ十分な検討がなされていない。筆者は「小砂丘忠義の綴方教育、その基底」（『人文科教育研究』第23号 1996）において、「小砂丘高知時代における変化」の存在を指摘し、そこにはそれまで彼が持っていた強烈的な「自己」に加え、生徒という「他者」を意識におくところの「内から外へ」の認識の獲得があった、と論じた。

この小砂丘における「自己」、また「他者」という概念をさらに検討するにあたっては、確井岑夫氏によって提出された論点—小砂丘における「生活重視—表現技術重視」の問題—を考察することに、その方途を求めることができる（「小砂丘忠義の綴方理論とその転回—『綴方生活』誌を中心に—」『季刊教育運動研究』5 あゆみ出版 1977）。氏は『綴方生活』誌上の小砂丘忠義の綴方理論を編年的に検討しながら、その構造を考察す

る。」として論を起こし、小砂丘の綴方理論において、「初期の『生活重視』の立場から後期の『表現技術重視』の立場へと綴方教育の力点が移行していると考えられる。」と結論した。そしてこの事態に対し、小砂丘が「一九三三（昭和八）年頃を分岐点に転回をした」という表現を与えたのである。しかし筆者としては、碓井氏によって小砂丘の「転回」として示された事態に対する、その「意味付け」が未だ不十分なのではないか、という疑問がある。そして、氏が「小砂丘の政治への対応」について重きを置いていなかったことを、その理由としてあげられると考える。この点に鑑み、本稿では「小砂丘におけるプロレタリア教育の影響」について考察をすすめる⁽²⁾。筆者はまず、その影響関係について、文献を手がかりにして展開をたどる。そして、その分析により得られた結果として、この時期に小砂丘が「表現技術重視」に傾いていった事情に（碓井氏のいう「転回」に対する「意味付け」にあたるものとして）解釈を加える。筆者は、小砂丘が受けたこの時期の「プロレタリア教育の影響」を考慮して、彼が「表現技術」というものに与えていた、ある「位置」を見出して行く。

まず小砂丘の政治に対する構え、その対応について、碓井氏によって言及されたところを見てみよう。氏は、『綴方生活』誌をめぐって、それまでの主宰者であった志垣寛に対し小砂丘等が離反決別することとなった「文園社争議」の事情に触れて、小砂丘等が「教育運動的な観点」を持っていたことをその決別の理由としてあげ、その後で

しかし、他方では政治主義的な綴方には警戒をし（「気持ち・感じ等のこと」第二巻第一〇号）、あくまでも社会事象を「自分の眼でみていく」ことを強調している。一九三〇年代前半のプロレタリア教育運動や階級意識に立つ文学思潮、社会思想のうねりのなかで、小砂丘の思想も揺れ動きながら、「殊に小学校の綴方といへば、決して理屈ではない。子供の作品をいかに見るか、それに投影している子供の姿を見ぬくと共に不断に見まもってゆかなければならぬ仕事である」（「全然別の次元から」第二巻第五号）と、ぼそっと本音をはいているのである。もともと小砂丘は、政治的言辭や行動には体質的に合わない人だったのではなからうか。

と、記している。また小砂丘が、あまり「いわゆる『政治的』な対応も反応もしていない。」とし、「むしろそれゆえに後期の表現指導体系化への自論が可能になったのだとも考えられる。」と、「もともと政治が体質的に合わない」ことが「表現技術重視」への道を開いたかのように述べている。さらに、小砂丘の「教育の煙幕的效果」（『綴方生活』第3巻第3号 1931）及び「児童文批評の吟味」（『綴方生活』第3巻第4号 1931）中の以下の文章を引きながら、「小砂丘は体質的に政治的言動にあわなかったと先に書いたが、右の二論文の引用も、それぞれ子どもの綴方作品を通じての、彼の精一杯の政治的な対応ではなかったか、と考える。」と処理している。ここでの小砂丘からの引用文は、次のものである。

かつて我々の教育は、何に向つて公奮を發し何処に向つて突進すべきかを教へなかつた。そして徒に向ふべき目標を隠蔽する煙幕の効果ばかりを上げていたのではないか。〔教育の煙幕の効果〕

今何れかの尺度を選ぶとする場合、少なくともプロレタリアイデオロギーを基底とするものでなければならぬ状態になつているといふことは、今日誰も否定されない事実だ。〔児童文批評の吟味〕

一部の人がいふが如くに、能動的に指導者が階級意識を注入することはいけないといふのは、一片の大義名分論にすぎぬ。自然発生的にでも何にでも、階級闘争の激化が予想されているといふ以上、指導者、教育者はその残燭の良心にかけても、最も意識的にその出発を促進すべきだ。(同前)

「小砂丘の政治的対応」に関しての、まとめ的な文脈においての確井氏の記述は、以下の通りである。

プロレタリア運動の高揚やマルクス主義思想の広がり、間違いなく小砂丘をとらえていたが、彼は自己の綴方理論と方法に固執して、一見「政治主義的」社会分析や作品批評をしているかにみえながら、その実、自分の本質を失っていないのである。それは、「甦生号」(第四巻第七号)以降にそうした「政治主義的」な論文がなくなり、それが単なるカモフラージュとみることができないことから判断される⁽³⁾。

確井氏の見方をまとめるならば、「小砂丘は、体質的に政治的な言辞には合わない人間だった。しかし、時代の状況の下、プロレタリア教育にとらえられ、それに対して彼としての精一杯の政治的対応をした。が、それでも小砂丘は自らの本質を失うことはなく、そのことが『表現技術重視』への道を用意していたのである。」ということになる。

しかし筆者には、確井氏の引いた小砂丘の文章からも、彼へのプロレタリア教育の深い影響を見ることは十二分にできると思えるし、「体質的に」政治に合わないということで、当時のプロレタリア思想が高揚した状況の中で、全国の綴方を書く子どもたち、綴方教師たちと真摯に向き合っていた小砂丘の思想的格闘を、簡単に処理してしまうことにも疑問を感ずる。「小砂丘が自分の本質を失うことなく、文章表現指導に道を開いて行った」ということには、その表現上、筆者も全く賛同するところであるが、「文章表現指導に道を開いた彼の本質」とは、「政治的に合わない体質」といった、ネガティブなものから説明できるようなものではあるまいと思われる。筆者は、「小砂丘にはプロレタリア教育の影響というもの明らかに存在し、しかも彼は、それを誠実に受けとめた。さらに小砂丘は、それを『彼独特の仕方』で『消化』していった。その『彼独特の仕方』による消化の結果、小砂丘は『表現技術』を重視する方向へと、自ら確信を持って進んで行ったのだ。」と見る。そして彼の「本質」というものは、この小砂丘独特の「消化の

仕方」—小砂丘綴方教育の構造—において存するものと考えのだが、そこには「小砂丘高知時代における変化」が深く関係している、というのが筆者の立論構想となる。本稿では、「表現技術」というものに彼が付していった「位置」を見出すべく、まずは筆者も年次的に小砂丘の言動を追いつながら、彼とプロレタリア教育との関係を調べることにする⁽⁴⁾。

2. 小砂丘におけるプロレタリア教育の影響

太郎良信氏は、文壇社争議前後における、当時の思想状況の綴方教育界への影響について記している（『生活綴方教育史の研究—課題と方法—』教育史料出版会 1990）が、そこにも見られるように小砂丘は、『綴方生活』誌同人の中では、プロレタリア教育の影響を受けとめることについて比較的慎重であったようである⁽⁵⁾。1930年「動きかはる眼」（『綴方生活』第2巻第7号）では、小砂丘は、「僕の友人は数年前、マルクス全集を購読したといふ廉をもつて一勿論外にいい名目はでつち上げられたのだろうが一首になった。最近でも、文戦や戦旗をよんでるといふ理由で小学校の先生が首になつたといふ話をきいてゐるが、かういふことはたまたま反抗気分を旺盛にする以外、決して何らの浄化にも防止にもなるものでない」と、役人の表層性を難ずるに止まっている。

また同年、「気持ち、感じ等のこと」（『綴方生活』第2巻第10号）では、先に碓井氏による説明においても見たように、「社会の機構に着眼するのは元より結構である。」が、「その意味は社会事象を題材にしさへすればよいといふのではない。」とし、「社会事象に対して書く文にも、作者の心持、作者の批評を要求しているのである。」と述べている。小砂丘はこの時点では、どんな題材をとるにしても「どこまでも自分の眼で見て」行くことを、第一に重視しているのである。（ただし、「それを見得る自己をもてといふ意味に他ならぬ。」という文中、「（勿論社会構成の一員としての）」との但し書きが、「自己」の後に付いている。このことは、次に述べる1931年への流れの上でとらえることができよう。）

1931年は、小砂丘のプロレタリア教育への急接近の年であったといえる。碓井氏も引いた「児童文批評の吟味」では、「プロレタリアイデオロギーを基底とするもの」を評価の尺度として選ぶといい、「能動的に階級意識を注入するのはいけないといふのは、一片の大義名分論にすぎぬ。」という。これは前年の、「社会事象を書く文にも、作者の心持、批評を要求している」といった発言とくらべるとき、その急転回ぶりを認めざるを得ないであろう。

1932年「全教育の上に立つ綴方」（『綴方生活』第4巻第8号）においては、「自然発生的な、生命至上的な綴方から目的自覚の綴方へと綴方が進んでをり、進んでゆくべきである」と述べ、「歌ひたいまゝに歌ひ眠りたひまゝに眠るといふ原始的な行動ではまづ以て生きてゆかれぬ。—教育もそこに目ざめたのである。勿論綴方もだ。」と綴方における「目的」というものを、はっきりと歴史的な「進化」の上で位置付け、それを肯定している⁽⁶⁾。1934年の「詩の問題・取材の問題」（『綴方生活』第6巻第5号）でも、

「学年のすすむにつれて漸次その生活なるものが個人生活から社会生活へ、共同体生活へと方向をとらねばならぬ」と、ここでは学校生活においても「進化」という概念を適用していると見える。

ところで碓井氏は、小砂丘の「生活重視」から「表現技術重視」への力点移動の中間点として1933年の「生活指導と綴方指導」を置き、その年を氏のいう「転回」の時点としたのだが、筆者としてはむしろ1935年に、小砂丘における非常にはっきりとした「表現技術重視」の姿勢を認め、それが「小砂丘へのプロレタリア教育の影響」との関連の上で語りうるものとなっていることに注目するものである。「現代綴方諸説の解明について」（『綴方生活』第7巻第3号1935）には、次の記述がある。「いかなる精神を以て実際指導にあたるべきであるか、（中略）若干僕の主観をのべると、目的論的には、我々自身の生活に科学性をもつこと、組織に対する自覚をもつこと、而して旺盛な生活意欲をもつこと等が今日最も重要なことであり、方法論的には、我われ自身の表現技術に対する徹底的な研究がまづ行はれなければならない。」これは、小砂丘の綴方教育の構想にあって、目的論において「プロレタリア教育」の観点をとり、方法論において「表現技術」をとっていること、そしてその両者が、彼の中では結びつけられてとらえられている、といった事態をよく表すものとなっている。また同年、「児童文評価の問題—意欲を最前線に出す—」（『綴方生活』第7巻第6号1935）では、「我われは茲に、今日明日の児童文のたねばならぬ内容を抽出し、同時にそれを児童文評価基準の最高条件とする。その基準として僕は『意欲』を最前線につき出さうとする。（中略）現在の諸情勢はまづ何よりも逞しき意欲を要求するものである。（この確信の根拠は他日諸君の叱正を願ふ）」と述べ、綴方教育における「意欲」というものを、「表現技術」とともに強く押し出してくるのである。

以上、小砂丘におけるプロレタリア教育の影響に関し、その言動をたどってきたところを、ここでまとめておきたい。

小砂丘は上京後、慎重にはあったが深いところでプロレタリア教育から影響を受けて行った。それは彼の高知時代には経験しなかったような、日々、状況から来る生活実感にも裏打ちされた、現実感の強いものとしてあった。編年的に言うならば、小砂丘は1930年ころにプロレタリア教育を強く意識しだし、そのことは次年1931年には、明瞭な形で自身の著作に現れるところとなった。以降、いわば露骨な表現をもっては彼はそれを表すことはなかったが、それは、その影響が小砂丘にとって、より「消化」されたものとして、彼の中で育まれていったことを意味するものであろう⁽⁷⁾。そしてその「影響—消化」の結果として、1935年から、「表現技術重視」を、それとともに「意欲重視」を、彼にとっての綴方教育の進むべき方途として押し出すに至ったのである。

晩年に近い、既に病によって弱りつつある体力にあって、彼はその自らの綴方に対する考え方について批正を乞い、人とのつながりを求めていた。「みんなの本気な研究に対してみんなが本気で批評し激励する義務がある。それによつて我われのつながりに血が通ふ。かくて我われは、いづくをめざして如何に進むべきであるか、おのづからに定ま

るであらう。』（「巻頭言」『綴方生活』第8巻第3号 1936）小砂丘は、プロレタリア教育の影響を真正に受けながら、それをもってさらに新たに、命の終わりを見るまで、綴方教育の中に自らを開こうとしていったと見える。

3. プロレタリア教育と「表現技術」の位置

本稿のまとめにあたり、この時期の小砂丘が「表現技術」に与えた「位置」を確認しておきたい。そのためには、碓井氏が提起したところの「小砂丘がこの時期に下したと見る『教育と政治論争』への一定の結論」（「小砂丘綴方理論とその転回—『綴方生活』誌を中心に—」前出）について考えなければならない。氏の言う「結論」とは次のものである。

社会改造に教育の無力を知りつつも、綴方教師として何ができるのかと問うとき、対象（生活）を正しく文章として表現できる技術を習得させ、そのことが対象と自己との関係を認識させ、生きる意欲を育てることにつながると思ったのである。たんなる生活教育の掛声だけでなく、それを実現する方法を綴方教育に即してもとめた結果が「表現技術重視」の立場にほかならない。

引用文中、「対象（生活）を正しく文章として表現できる技術を習得させ、そのことが対象と自己との関係を認識させ、生きる意欲を育てることにつながる」という部分は、小砂丘における「自己」と「他者」、そして、その関係において「意欲」を考察する上での非常に大きな論点になる箇所となっていると考えるが、ここでは本稿における目的である、小砂丘が「表現技術」に与えた「位置」を確認する為に、「社会改造に教育の無力を知りつつも、綴方教師として何ができるのか」という問いに関して検討してみたい。

この問いについては、中内氏も重要なものとしてとりあげている（『生活綴方の原像考—小砂丘忠義論』前出）。碓井氏によっては「小砂丘はこのようには言っていない、もともと政治には体質が合わないのだ」という文脈でとりあげられた、小砂丘の「思ひだすまま」（『綴方生活』第3巻第8号 1931）の次の箇所を、中内氏は「小砂丘は錯乱したのか、転向したのではないかと思わせるような内容のもの」として、問題化する。

その頃（高知時代；筆者注）「地軸」誌上で、教育による社会改造を上田庄三郎君が唱えたに対し、王無久君が、教育は無効だ、社会改造が先づ成されなければならぬといふ論陣をはつたことだつたが、のんきものの僕は、やつぱり教育による社会改造の可能を信じてゐたものだつた。だから、綴方をやるといつても、終始その心組でやつてゐたものだつた。

東京へ来て、鑑賞文選の編集をはじめてからも、やつぱり僕はさう考へてゐたのだつたが、しばらくするうちに教育の無力—社会改造に対して—であることを知つた。全然無力とはいへないが、殆ど無力なものである。

といふことになれば、教育とは一体何をするものであるかといふことが考へられねばならない。それがはつきりしなければ、自分らのする仕事の意義がなくなる。

自分らは、何を目あてに仕事をして行けばいいのか。

皮層の常識論にすぎないが、さういふイロハから出なほして数年たつた。つまり、東京へ来て見ると、土佐にゐた頃とは比較にならぬ世の中のことが目につく。方々の人間同志より合つて暮らしてゐる東京の生活の表も裏もわかつて来ると、今までの教育といふものについて、疑いを抱かねばならなくなりそして今までの教育を多分に修正しなければ通用しない世の中を知つてきたのである。

要するに今日の教育は、完全に政治に隷属してゐる。そして、国家の意図する教育作業を行ふより外に、教師としての手の伸ばしやうはない。国家の意図する所は、その国家に順応する人間を作ることに外ならぬ。その国家その時代に順応する人間といふ処に問題がある。

現代の状況下に於いて、国家ははたして如何なる人間を要求してゐるか、といふ処に教育者はまづ著目しなければならぬ。そして、真に国家が要求してゐる人間を養成する技師となつて働く所に教育の本義がある。要するに時代の状況に善処して教育を行ふことは国家が許してくれてゐる。そこに我々の仕事があるのである。

といふやうな見地に立つて今は綴方を眺めようとしてゐる。(単に僕は思ひ出を語つてゐるのであるから、現在僕の得てゐる結論をここに述べようとするものでない)

中内氏は引用の後で、この件を「転向」とはとらえず、「転向のないままこのように説きうる立場」として理解していくことを提案し、氏自身その解釈を試み、非常に有効な議論を生み出している。それは、先に留保した碓井氏の「結論」の一部とも関連を持つものになると考えるが、ここでは、小砂丘が「表現技術」に与えた「位置」を確認することを目的に論を進める。

この文章において衝撃的なのは、小砂丘が「教育の無力—社会改造に対して一であることを知つた。」と述べていることにある。それはさらに「今日の教育は、完全に政治に隷属してゐる。」との表現になる。しかしここで、この文章の読者として、「現状の国家、そこにおいて為されている教育に、ただ我々教育者は従うだけだ。」という読みを可能にする要素は、実はこの文章中、どこにも含まれてはいないことに注意しなければならない。(ゆえに、「転向」「錯乱」を読むとろうとすることは、読者の恣意的な読解になる危険性がある。)[「国家の意図する所は、その国家に順応する人間を作ることに外ならぬ。その国家、その時代に順応する人間といふ処に問題がある。現代の状況下に於いて、国家ははたして如何なる人間を要求してゐるか、といふ処に教育者はまづ著目しなければならぬ。」と、小砂丘は記している。そして彼は、「現在僕の得てゐる結論をここに述べようとするものでない」と断っているのだから、その「結論」は、この文章の読者が読みとるべきものとなっている訳である⁽⁸⁾。

ところで、小砂丘がこの文章を発表したのは、1931年であつた。先に見たように、こ

の年は彼においてプロレタリア教育の影響が顕在化した年である。ゆえに、この文章の内容もその影響を考慮に入れて読むのが妥当ということになる。(そこでは、「転向」「錯乱」といった解釈とは正反対の理解が生まれることになる。)すなわち、「小砂丘は、『国家』という言葉に『社会主義的』との意味を含ませている。」という解釈が浮かび上がってくるのである。そう読めば、「社会主義的國家の実現のために教育は力を尽くすべきである」という、この時期に彼が影響を受けていたプロレタリア教育における「目的」とも矛盾無く、この文章を理解することができるであろう⁽⁹⁾。

ここにおいて、小砂丘の中で、「(社会主義的) 國家の実現」という「目的」は、綴方教育の「上位概念」としての位置を与えられたことになる。綴方教育の内部構造でいえば、その「目的」は「(社会主義的) 國家の実現」であり、そこに向けて求められる「科学的」な「方法」にあたるものが「表現技術」なのである。「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響」は、彼の綴方教育において、『表現技術』に対して『目的』実現のための『方法』という『位置』を与える」という形をもって現れたのである、と結論付けることができよう⁽¹⁰⁾。

注

- (1) 「野村は『小砂丘は鯨のような奴で何んでも飲み込む』と嘆息したが、人間でも清濁併せ呑むで、右でも左でも包容した。」とある。(『上田庄三郎著作集5 抵抗の教育』国土社 1978)
- (2) 筆者は、「小砂丘におけるプロレタリア教育の影響」を論ずる際の、この「プロレタリア教育」というタームについては、「教育の上位概念として、社会主義的國家建設という目的を置くところの教育」といった、概括的な意味において使用していく。「当時のプロレタリア教育とは、どのような内実を持ったものであったか」という意味での、状況分析的な議論によるアプローチは本論文ではとらない。
- (3) この引用部後半の文意は、「政治主義的な論文がなくなったことは、カムフラージュとは見られない。ゆえに『甞生号』より前の政治主義的な論文も、(確井氏の言う)『小砂丘の精一杯の政治的対応』の現れであり、それを彼の本质と見ることはできない。」ということであろう。尚、小砂丘の政治的配慮による「カムフラージュ」については、彼が「表現技術重視」に傾いて行ったことに関連しても考え得ることであるが、この件については後述する。
- (4) 高知時代の小砂丘にも社会主義的な思想との接触はあったようだが、それは本稿で論じているような類のものではなかった。小砂丘の直接の教え子である津野松生氏は、小砂丘が当時『社会主義神髓』という本を借覧したり、幸徳秋水の遺品を見に出かけたりしていたことを記しており、また「革命は土佐の山間より」という言葉を口にしていて、とも述べているが、津野氏も記すように、この「革命」とは「自由民権運動」の標語であり、さらにはそれは、広く「人間革命」の意であったようである(「山の唄のころ」『作文と教育』小砂丘忠義 15周年記念号 1952,10)。また、小砂丘高知時代の「高石正治氏宛書簡」(1919,4,30)には、「個人主義乃至社会主義はよいぞ」という記述があるが、ここで彼が「個人主義」と「社会主義」とを無造作に併記するというのもあわせて考えてみると、高知時代の社会主義的な思想との接触は、上京後の、明確な意識を持ってそれに接したところの「社会主義」から受けた影響とは、異なる類のものとしてとらえておくことが適当であろう。
- (5) 太郎良氏の記述によると、上田庄三郎は「大いなる階級対立の前に、綴方を通して大人と子供とは共同戦線をはるべきだ」とし、峰地光重、野村芳兵衛も「プロレタリア文学」という表現を使って、それが直接綴方教育に影響を及ぼすもの、とする発言をしていた。それに対し小砂丘は、そういっ

た「時代の動きが、どういふかたちをとって子供の眼や耳を動かしてゆくか」を見ていこうとしている、という処し方である。(『綴方生活』復刻版全15巻月報 No.3 1978)

- (6) 「原始」－「文化」という概念での対立項が、小砂丘の言辞の中に現れるのも、この時期に特有の現象である。このことは、1935年の「綴方における地方性について(二)一特に、土佐の友人に－」(『綴方生活』第7巻第3号)では、次のように表現される。「これらのよさは結局原始的なよきである。個人生活、村落生活にはそれでも事たりる。(中略)一が、もはやそれだけでは事が足りなくなつてゐる。それらのよさをもう一度再鍛錬すると同時に、今までになかつた新生活綱領をも加へなければならぬ状態に世の中が、とつくの昔からなつてゐる。」さらに同年、『綴方生活』第7巻第4号の「文章技術の徹底的注入一尋五・六綴方の拓野一」においては、よりはっきりとした、「単なる原始人の遊びの生活から、段階を追うて、文化人へと進み行く」「文化人への目的意識」といった表現になる。これは、高知時代の記述である「芸術として見たる小学校の唱歌概論」(嶺北初等教育研究会第五区、発表年月未詳)の中にある次のものとは好対照をなす。「文化人とは一独断にすぎるが一まことに人間のダシガラである、味も素気もあつたものか。文化は文化の自らのために自らの墓石を彫るものと思はれる。」尚、小砂丘が綴方教育に持ち来た「エートス」を表すものとして、中内氏によって発掘され、小砂丘研究史のなかに一定の認知を受けている「原始子供」という概念は、上記の件に照らして、上京後の小砂丘を考慮に入れた上で、ある範囲での修正を受けなければならぬだろう。
- (7) 前出、碓井氏の指摘－「魁生号」(第4巻第7号)以降に「政治主義」的な論文がなくなる一に対しては、筆者は、ここで述べた意味(小砂丘によるプロレタリア教育受容の「消化」が進んだ結果という意味)において賛成である。
- (8) 小砂丘の高知時代の手稿「若き教育者に送る」(研究発表資料、発表年月未詳)に、次の文章がある。「最具体的に永続的に、而して教師があり対象があり、しかも、他の社会と境を画して教育事業は最行ひ易かるべく作られたものが学校である。然れども、学校は学校の為の学校ではない。国家の為、世界の為のそれである。教育自身が何の為に存在するものでもなく、教育自身の為に存在するものである。教育が若し何かの為に、依存的地位に立たされた時は教育の墮落である。その教育の一部をなす学校教育は如何。私は学校教育の価値を疑ふものである。」この文章は、「教育による社会改造の可能を信じてゐた」ころの小砂丘の文章ではあるが、今、本文に引用した「教育の無力－社会改造に対して一であることを知つた」小砂丘の文章と、ある重要な共通点が認められる。それは小砂丘が、教育というものを、大きな「目的」の為に資するものとして、考えているということである。高知時代の引用において彼は、「教育は教育の為のもの」としながら、同時にそれを「国家の為、社会の為」と言っている。この引用部の前には、「自然の教化力」を「宇宙の仕事」と言い、それを、教育を考える上で参考にするべきものとしている。小砂丘には、教育を構想するとき、それを大きな「目的」に資するべきもの、とする見方があるのである。上京後の引用文においても、小砂丘は同じシエマを使っているといえる。すなわち、彼はそこで、プロレタリア教育の影響の下において、教育を構想する際の大きな「目的」を探つたのである。
- ところでこの解釈は、先に記したように、上京後の引用文を「転向か、錯乱か」というふうにと恣意的に読むことによっては為され得ない。また、ここにあげた小砂丘の高知時代の引用文についても、例えばそれを、「教育が、そして学校が民衆を忘れて『国家の為、世界の為』のものになっているのではないか、『教育の為の教育』に改めていかねばならぬ、というのが、小砂丘の主眼であった。」(太郎良氏 前出 1990)のように読むことによっては為され得ない。ここでの小砂丘の文意は、「学校の教育は、依存的な地位にあるものとしての学校の為にあるのではなく、より大きい『目的』としての、国家の為、世界の為にあるのだ」ということである。
- (9) 先の引用(「全教育合力の上に立つ綴方」)での例をはじめとして、この時期小砂丘は、「自然発生的な、生命至上的な綴方から目的自覚の綴方へ」というように、「目的の自覚」ということを非常に強調している。
- (10) 小砂丘の「表現技術重視」に、政治的なカムフラージュを直截に見ることは、以上の議論の結果、難しいであろう。もちろんそれは、小砂丘が政治的言辞を発するにおいて無頓着だった、というこ

とを意味するものではない。「尋二綴方指導の実際―『綴方読本』の研究・その一―」（『綴方生活』第6巻第2号 1934）において、小砂丘の共同執筆者であった田川貞二氏は、「当時『綴方生活』が赤いと言はれ出した頃でもあり、やはり理論的な事より実際のな事に重点を置き、カムフラージュすべき時とみて、児童文・児童文集等の研究に重点を置くようにした。」（『綴方茶話』第28号 1985）と述べており、小砂丘自身、ある種の危機感をもって時勢に処していたことは想像に難くない。しかし、この「尋二綴方指導の実際」においても、小砂丘は「二、『綴方読本』編集について」の中で、「共同生活体に於ける公民的自覚を高めることを深く考慮して編集し」と、プロレタリア教育の理念を内包させる形で文章を綴っている。ゆえに、小砂丘が「表現指導重視」に向かったのは、直接に「カムフラージュの為」なのではなく、「プロレタリア教育の小砂丘による『消化』の結果」と見るべきだろう。小砂丘は「甦生号」以降、直接的な表現でなく、より「消化された」、いわば洗練された表現として、「目的」「方法」などのタームを用いながら、彼の綴方教育論を記述して行くのである。

（いいだ かずあき 筑波大学附属中学校教諭）